

平成 23 年 11 月 11 日 16 時

夕暮れ時がやってきた。

太陽が僕の顔を真っ赤に染めた。

「もう夕方か、どれだけここにいたんだ？」

*

誰に尋ねるでもなく後藤英資は言葉を吐いた。しかし彼の言葉に答える人は誰もいない。周囲に人がいないからという訳ではない。現に彼の周りには子供たちや女学生が頻繁に往来している。だけど、彼の吐いた言葉はあまりに弱々しかった。それくらい、彼は心も身体も衰弱していた。

*

「僕がずっとここにいても、困る人間はもういないか……」

僕はこの数日、デパート前にある噴水広場に頻繁に来ていた。

ここは「広場」というには申し訳程度のスペースで、そもそもデパートの本館と別館を繋ぐ通路の脇にある休憩所といった方がしっくりくるような場所だ。

でも僕は、この場所がとても気に入っている。

一見、無造作に置いてあるガラスのテーブルが、その日の陽射しの加減で無数の表情を見せてくれる。また通路が吹き抜けになっているため、夏には夕立後の虹を特等席で眺めることもできるだろう。一番気に入っているのは無造作に置いてある椅子たちだ。一見シンプルだが、よく見ると実にセンスがいい。これをデザインしたデザイナーの名前を知りたい衝動に駆られるほどだ。ただ唯一、惜しいのは吹きさらしのため、置いてあるそれらのオブジェが少し汚れてしまっているところだ。しかし、そうなることで自己主張の強さが少し軽減されて、今の僕にとっては、逆に心地よくそれらのオブジェを眺めることができた。

僕がこの広場の存在を知ったのは三年前だ。毎日、家から車で出勤する際に見ていた。

その頃は「ああ、こんなところに広場があるのか」と思う程度だった。なぜなら三年前の僕は仕事が忙しくてこの広場の存在を気にしている余裕なんてなかったから。

だけど、今は違う。

ベンチのペンキの剥がれ具合からどれくらい前に造られた物なのか思いを巡らせてみたり、噴水が吹き出すタイミングがとても考え抜かれて造られていることに興味したり。そんな他愛もないことに考えが及ぶほどに今の僕には時間があった。

だが……僕には金がなかった

自慢じゃないが「ない」とかいうレベルの話ではない。まったくないのだ。しかし「ある」ものもある。借金だ。それも三〇〇〇万円もの借金だ。

僕がベンチのペンキの剥がれ具合や噴水の仕組みについて一日中考えを巡らせるのは自分の置かれている現実からほんのわずかでも離れていたかったからだ。今、僕にできることはそれくらいだろう。いや、正確に言うと、僕ができることはそれくらいだと思いたかった。

「暗くなってきたな。帰ろうかな」

僕はそう言いながらも立ち上がれなかった。帰ったところで僕のやることは誰もいない安アパートの一室で寝ることだ。そのアパートにいられる日数もあと一週間を切ってしまったが……。

しかし僕は、ここよりはまだ暖かいはずの場所に戻ることをためらっていた。

もし、家に帰れば本当にひとりになってしまう。僕はとにかくこのベンチに座り続ける理由を探し続けた。

「帰ろうか…… 帰りたくない…… 帰ろうか…… いや帰りたくない」

ベンチで深刻な顔をして独り言を呟いている男に、通り過ぎる皆が一様に怪訝な視線を投げてくるが、見返すと誰もが顔を背け足早に去っていった。

「流行なんて虚しいもんだな……、みんなあんなに僕の店にやってきたのに」
そう呟くと、だんだん涌き上がってくる怒りと哀しみに、僕は勢い立ち上がって、まっすぐ前を見て言葉を放った。

「僕の何が間違っていたっていうんだよ。できることはすべてやったのに！僕は間違っていたわけじゃない。運が悪かったんだ。とにかく運が悪かったんだ！」

間違っていたいなかったことを誰でもいいから認めてもらいたい、そんな情けない自己主張で僕の心は満ち溢れていた。

「……ちくしょう……」

気がつくくと、涙で目がうっすらと潤んでいた。僕はベンチに腰を下ろして、気持ちが落ち着くのを待つことしかできなかった。

平成 23 年 11 月 11 日 17 時

秋の陽はとっぷり落ちて、あつという間に夜がやってきた。街灯がチラホラ点きだ

して、僕の周りもぼんやりと人工の光で照らされ始めた。

だけど、僕はというと、目はうつろで、大量生産のジャンパーで寒さから身を守りながら小刻みに震える姿はまるで、哀れな小動物みたいだったろう。

「温かいものが欲しいな……」

僕はジャンパーのポケットに手を入れて必死で小銭を探した。コッソ、中指のツメに固い感触が当たった。ほっとした気持ちで全身に広がる。

しかし、その硬貨を手で引っ張りだしとき、さっきよりもひどい落胆が僕を襲った。

「十円たりない」

手の平に載せた硬貨の数はいくら数えても同じだった。

「飲み物ひとつ買えないのか……」

ため息をついて、ようやくベンチを離れることに決めるとき、背後から声が出た。

「これ」

暗がりの向こうから、たしかに声が聞こえた。柔らかく芯の通った響きが少し心地良かった。

「誰？」

僕は目を凝らして暗がりの向こうを見つめた。やがてほんやりとした影は、はっきりとした輪郭に変わった。

「これ、良かったらお貸ししますよ」

そこには十円硬貨を持った品の良い長身の老人が立っていた。見たところ、歳は七十歳位だろうが、姿勢が良いせいとか、かなり大きく見える。白いあご髭をたくわえているらしいその老人は微笑を浮かべながら僕にゆっくりと、しかし遠慮なく近づいてきた。

「どうぞ」

老人は十円硬貨を僕の手に渡し、強く握った。

「あ、ありがとうございます。どなたか存じませんが、よろしいんですか？」

僕は少し不審に思いながらも老人の厚意を受けることにした。口調は実に柔和だが有無を言わせぬ不思議な迫力も同時に感じた。だけど老人の厚意を受けた一番の大き

な理由は、とにもかくにも温かいものを飲みたかったからだ。僕は広場の脇にある自動販売機に硬貨を入れた。かじかんだ手をさすりつつ急いで硬貨を投入したから、何枚か硬貨を落としそうになった。

なんとかすべての硬貨を投入し終え、お気に入りのロイヤルミルクティーのボタンを押そうとした時、またしても背後から声が聞こえた。

「本当にそれでいいのですか？」

もちろん、老人の声だ。

「はい？」

僕は老人の発言の意図が読めず思わず大きな声で尋ね返してしまった。

「だから本当にそれでいいのかね？」

「言っている意味がわからないのですが……」

老人はゆっくりと歩きながら自動販売機の前に立ち塞がった。

「だから本当に、本当にそれでいいかね？」

老人は先ほどと同じ柔らかくも迫力に満ちた声のトーンでまったく同じことを再度尋ねてきた。

「なんなんだ？ この人」

老人の意図がまるでわからない僕は、ほんの少しだが苛立ちを覚えた。

確かに十円を貸してくれたのはこの老人だ。もちろん感謝もしている。しかし、たかが十円だとも言える。十円程度で飲むものまで指図されたのではたまらない。子供じみていることは十分承知しているが、僕は今、温かいミルクティーが飲みたくて仕方がないのだ。

僕は思い切って老人に言った。

「お金をお借りしたうえでこんなことを言うのは、重々失礼だと承知していますが、僕が何を飲もうが僕の自由ですよね」

「……………」

老人は僕が逡巡の末に吐いた言葉に何も答えなかった。

「ひょっとして……僕が十円を借りたとき、あなたに頭を下げなかったことを怒って

いますか？」

その質問にも老人は答えなかった。

「何とか言ってもらえませんか？ もう遅いかもしれませんが、この通り頭を下げますから勘弁してもらえませんか？」

僕は、この状況をなんとかやり過ごそうと申し訳なさそうな態度でペコリと頭を下げた。

しかし、老人はそんな僕の態度にまるで動じることはなかった。

「**そう言うなら、もっと頭を下げてもらえるかね**」

にこやかに微笑みながら僕の目を見てそう言った。老人の予想外の一言に、僕は神経を逆撫でされるようだったが、精一杯の作り笑顔でこう返した。

「十円くらいで、随分強く出るんですね。頭を下げればいいんですね。はい、ありがとうございます！」

僕はヤケになりながら、自動販売機の前に立つ老人に頭を下げた。

さっきよりも丁寧に頭を下げる僕に老人は衝撃の一言を告げた。

「**もう少し深く下げてもらえるかね**」

僕は何かの聞き間違えだろうと思いい老人を睨みつけた。

決して短気な人間ではないけれど、立て続けに理不尽な要求をしてくる老人に僕は怒りを感じた。謝罪で頭を下げることは僕の中の苦い思い出を刺激した。

でも、僕は怒りをぶちまけるのを踏みとどまった。脳裏に妻と子供の顔がはつきりと浮かんだからだ。

（ここでこの老人と喧嘩したところでなんになる。また、恵美と愛子に迷惑をかけることになるじゃないか。今だって十分迷惑をかけているのに、こんなくだらないことでふたりにこれ以上迷惑はかけられない！ 別に減るもんじゃないんだ。そして早く家に帰ろう。早く家に帰らなかつた僕が悪いんだ。家に帰って、今日起こったことは全部忘れてしまおうんだ）

心の声に耳を澄ました僕に冷静な判断能力がよみがえってきた。

「わかりました」

僕はいくぶんクリアになったその頭を深々と下げた。

そして頭を上げようとした瞬間、僕は老人が僕に伝えたかったことをすべて悟った。

「そういうことか…」

僕の下げた視線の先に「あたたかい」と書いてある列があった。それは三段目だった。この販売機の陳列は全部で三段。その一番下の列、つまり三段目が「温かい飲み物」が並んでいる列なのだ。その上の一段目と二段目は「冷たい飲み物」のカテゴリーだったのだが、僕はとにかく早くミルクティーを飲みたくて焦っていたから、とっさに目に入った二段目の列にあるミルクティーを見て、そのボタンを押そうとしていたのだ。

まさか「冬場に冷たいミルクティーが自販機に入っているなんて思わない」という思いこみと「仮に温かいミルクティーがあつたとしても三段目にあるはずがない」という先入観、さらに付け加えるなら「早くミルクティーを買って暖をとりたい」という思いが頭の中を支配していたのだろう。僕はこの老人に止められなかつたら「冷たいミルクティー」を買っているとこだったのだ。おおげさに聞こえるかもしれないが、今の僕にとっては「たかがミルクティー、されどミルクティー」なのだ。

老人は僕がそれに気づいたことがわかったのか、そのまま話を続けた。「君は素直な人だ。こんな老人の不遜な要求にここまで応えるとは……」

老人は自販機の前を僕に譲るといつそうの笑みをたたえながらこう言った。

「本当にそれでいいんだね？」

僕は今度こそ自信を持ってこう答えた。

「ええ もちろん！」

その時、僕は久しぶりに笑顔で答えている自分に気づいた。

「おいしい……」

僕の喉に温かいものが流れ込んでいく。温かいミルクティーが僕の心と身体の両方を溶かすのにそれほど時間はかからなかった。老人は僕がみるみる元気になっていくのを見てただ嬉しそうだ。

「実に不思議なもんだな」

老人の一言に僕は我に返った。

「どこにでも売っているミルクティー。しかし、今の君にとっては特別な飲み物なん

だろう」

僕は自分が思っていることを言い当てられ老人の方を急いで振り向いた。

老人は表情を変えずにそこに立ったままだった。

「どこのどなたか存じませんが、今日は本当にありがとうございます。それと……」

「それと？」

「先ほどはいい加減な態度を取ってしまったって申し訳ありませんでした」

僕は老人に再度、深々と頭を下げ感謝の念を伝え、同時に非礼を詫びた。

「いいえ、私こそ」

老人も僕に頭を下げた。そしてこう続けた。

「君に会えて、本当に良かった」

僕はほっとすると老人に背中を向けて歩き出そうとした。

しかしその時、老人が僕を呼び止めた。

「ひとつ、いいかな？」

その言葉に僕は少し緊張しながら老人の方を振り向いた。

「さっきの十円はちゃんと返してくれんか？」

老人は真顔で僕にそう告げた。それは出会って初めて見せる表情だった。僕は一瞬身を固くした。しかし、老人はこう続ける。

「君が立ち直って、お金を自由に扱えるようになったら必ず返しなさい」

(…なんだ、この老人は僕を励まそうとしてくれるのか？ きつと僕がさっきまで相当落ちこんだ表情でいたからだろう。)

「いいですよ。必ず返します。この温かいミルクティーのご恩は忘れません。十円なんて言わずに、僕が本当に復活できたら、この十円を百万円くらいにしてお返ししますよ」

「それは、ダメだ」

老人は僕の目の前で首を大きく横に振った。

「え、なんで？」

「返しすぎだな」

「返しすぎ？」

僕は老人の真意を掴みかねた。

「じゃあ、いくらなら受け取ってくれるのですか？」

僕は恐る恐る尋ねた。

「そうだな……返すなら十二円くらいが適当かな」

「え、十二円？ いやいや、気持ちの問題ですからこれは。現に僕はあなたのおかげで、こうしてホッと一息つくことができたんですから……百万円でも安いと思えるときが来たら、必ず払いますから払わせてください」

僕は内心「面倒くさい人だな」と思いながら、体裁のいい言葉を並び立てて、この場を収めようとした。

しかし、次の瞬間、思いもかけない言葉が老人の口が放たれた。

「……………だから、潰れたんだな」

「え？」

老人の声は小さかったが、僕の心をざわつかせるには十分だった。

「君はお金について、あまりに知らなすぎるようだ。ずさんで曖昧で勢いにかかせて…大盤振る舞いする、そんなだから会社を立ちゆかなくしてしまったんだ」

老人が発した言葉に僕は激しく反応した。さっき感じた怒りが、再びよみがえった。「言っていることと悪いことがありますよ！ あなたは誰なんですか？」

「私はジョーカーです」

「ジョーカー？ あのランプの？」

「はい。その通りです」

老人はさも当たり前のようにそう答えた。

（こいつ、いったいなんなんだ？）

僕はこれ以上、この老人に付き合ってはいけないと思い、顔を背け、何も言わずに違う方向に歩きだそうとした。

「君は知っているかい？ 日本の大手銀行が一年間で受け取る金利の総額を？」

「……………」

「およそ五兆円だよ。反対に顧客側に払う金利の総額は数千億円程度。その差額は

丸々銀行の利益だ。まったく、人から金を集めて、それを人に貸してこの利益だ。いい商売だな」

僕の背中に向けて、老人は独り言のように言葉を投げかけた。僕は、その五兆円という数字に気持ちさがざめいた。この老人は、何を言おうとしているんだ？僕は老人に対して向き直った。

「『金利』という言葉は知ってるね？」

老人はまるで子供に問うようにゆっくりと僕に尋ねた。

「バカにしないでください。これでも僕は経済学部出身です」

「私がさっき君につけた金利は二〇%だ。金利が二〇パーセントなんて法外だと思わんかね？ 二〇パーセントという金利がつくということは、君に信用がないからだ」

「ぶしつけだなあ」

僕は苦笑して流そうとしたが、老人はおかまなしに続けた。

「でも、それも当然のことだ。私は今日初めて君に会った。まるで君のことを知らん。生年月日も、家族構成も、職歴も。しかも、こんな時間にこんな場所で長い時間佇んでいたようだ。時間など気にしないでいい悠々自適な人間だとしたら、飲み物を

買う小銭がないことに説明がつかない。会社員なら、残業か、アフター5の飲み会と
いった所に向かう時間帯だろう。しかし、どちらでもないらしい。すべての要素を鑑
みるとこの金利は低いくらいだな。銀行だったら貸しもしないだろう」

こちらの痛い部分をどんどん指摘してくる老人にムカつくを通り越して、呆れてき
た。何か言い返してやらなければ、気が済まない。

「たしかに僕の信用度は低いかもしれない。でも、たかが十円を貸したくらいで、次
から次へ厭味を言ってくる人の神経も疑いますね」

「ハハハ。君はきつとそうやって『たかが十円』と思いつながら借金を繰り返してきた
んだらうな」

僕は思わず「ギクツ」とした。まったくその通りだったからだ。しかしそれにはそ
れ相応の理由があるのだが、今、この老人にそれを一から話す気にはなれなかった。

「私を誤解してもらっては困る。これでも随分と寛大に支払い猶予を設けたんだ。
『君が立ち直って、お金を自由に扱えるようになったら』ということは、ほぼ無期限

だ。今の君の様子からすると、それは遠い未来かもしれない。いや、どうだろう？
果たしてそんな時がくるか、わからんね」

「あなたが自分のことをジョーカーと言った意味がぼんやりとですがわかってきまし
たよ。これだけ短い時間でこんなに人の気分を悪くさせるなんて凄才ですよ」

老人は笑いながら僕に礼を言った。

「ハハハ。それはどうも。今日は本当に楽しい」

きつと暇を持って余した老人なのだろう。いい暇つぶしの相手を見つけたと思ってい
るに違いない。

でも、こんなこと僕相手に話すなんて、老人は話題を間違えてる。

僕は元銀行マンなんだ。

その事実を言ったら、老人はきつと驚くだろう。僕はいつそれを言おうかと構えて
いたとき、老人は急に真顔になって問いかけてきた。

「なぜ、私がこんなことでくどくどと言っていることに疑問を持っているようだな。

さつき君が間違えて冷たいミルクティーを買うのを止めた後、それでも君には、選

択肢が三つ残されていた。ひとつはそのまま温かいミルクティーを買う択肢、それとあとふたつ……」

老人はひと呼吸置いて、僕に諭すように言った。

「温かいミルクティーを買わないという択肢と、ここから歩いて、三分ほどの所にあるスーパーの中で、一〇〇円以下で温かいミルクティーを買うという択肢だ。もちろんスーパーの中のミルクティーが温かい保証はないが、行って確かめることもできた」

たしかにそうだが……。

「僕は今、ここで温かいミルクティーが飲みたかったんだ」

「そう、君はさっき、『今』、ということにこだわっていた。『今』すぐにでも暖をとりたいと思っていた。だが、私からお金を借りて、ミルクティーを買ったおかげで、『今』こうして、『面白くもない話を聞かされる羽目におちいつてる」

この老人は何を言いたいんだ？

何か理由があつて僕に近づいてきたのか？

「あなたはいつたい何者なんですか……？」

老人は上品にほほ笑むと一息入れて言葉をゆっくりと紡いだ。

「ジョーカーです。君のね」

老人はそういうと、ゆっくりと腕を上げ僕を指さした。すると、まるで魔法のように七色のライトに照らされた噴水が、秋の夜空に噴き上がった。

僕の中で「この男を知りたい」という感情と「この男に深入りすべきではない」という感情がせめぎあい、整理がつかなくなってきた。

老人と僕の長い夜がこのとき始まった。